2024年度学校推薦型選抜（11月15日実施）

国　語　問　題

（〈国 1 〉ページ～〈国12〉ページ）

Ⅰ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一九四五年、廃墟となったドイツには一二年におよんだヒトラー政権に関する膨大な記録資料が残され、ナチ支配の実態が続々と明らかになりはじめる。アーレントはこの資料の山に立ち向かいながら、何が起こったのかを理解するために、ショッケン・ブックス出版社での仕事のかたわら片時も休むことなく執筆を続け、四九年秋に大著『全体主義の起原』の原稿を完成させた。その本は最初に見たときだけでなく「もう一度見直したときにすらも、まったく言語道断としか見えないことを理解しようとする試み」であった。

精神科学における方法。因果性はすべて忘れること。その代わりに、出来事の諸要素を分析すること。重要なのは、諸要素が急に［A］した出来事である。私の著書の表題は根本的に誤っている。『全体主義の諸要素（The Elements of Totalitarianism）』とすべきだった。

（『思索日記Ⅰ　1950-1953』）

なぜ因果性を忘れなければならないのだろうか。アーレントにとって最も重要だったのは、人間の無用性をつきつけたガス室やそれを実現させた全体的支配という出来事の「法外さ」と「先例のなさ」を直視すること、そして「政治的思考の概念と［B］を破裂させた」その前代未聞の事態と向き合うことだった。アーレントにとって理解とは、類例や一般原則によって説明することでも、それらが別の形では起こりえなかったかのようにその重荷に屈することでもなかった。彼女にとって理解とは、現実にたいして前もって考えを思いめぐらせておくのではなく、「注意深く直面し、抵抗すること」であった。従来使用してきた［B］を当てはめて納得するのではなく、既知のものと起こったことの新奇な点とを区別し、考え抜くことであった。

アーレントは、因果関係の説明といった伝統的方法によっては、先例のない出来事を語ることはできない、と断言する。［あ］全体主義という新奇な悪しき出来事は、「けっして起こってはならなかった」ことだった。それが運命といったものの流れのなかで必然的に起こるべくして起こったことではなく、人間の行為の結果としての出来事だったということを、アーレントは強調する。人間がどうなるかは人間にかかっている。そのためには新しい語り方が必要だと彼女は考えた。「保存したいのではなく、逆に破壊するべきであると感じて

いる事柄について、つまり全体主義について、いかにして歴史的に書くか」という問題だった、とアーレントはいう。

私たちはこの大著を読むとき、その題名からして反ユダヤ主義や帝国主義や全体主義の歴史が書かれていると思ってしまう。しかし、アーレントは強制収容所というかたちで［A］化した現象の諸要素を、それらが具体的に現れた歴史的文脈のなかで分析し、語った。「反ユダヤ主義」や「帝国主義」の部で語られる諸要素は、けっして必然的に全体主義へと直結するわけではない。アーレントの叙述を注意深く読むと、そこには行為者かつ受苦者としての人間の選択のあり方、動き方が描かれている。別の可能性もありえた、それなのにどうしてこのような事態にいたってしまったのか、ということを考えさせる物語なのである。それは、要素を明らかにすることによって、それらの要素が再びなんらかの形で全体主義へと［A］化しようとする時点で、人びとに思考と抵抗を促すような、理解の試みでもあった。

第一部「反ユダヤ主義」では、一八世紀末から一九世紀末にかけてのプロイセン、オーストリア、フランスのユダヤ人の動向とナチ・イデオロギーの根幹となった反ユダヤ主義に関連する歴史的事象との関わりが描かれる。宗教的なユダヤ人憎悪とは異なる反ユダヤ主義は、社会や政治の同時代的な問題状況と並行して現れた。そのさい反ユダヤ主義は、ナショナリズムの昂揚期ではなく、国民国家システムが衰退し帝国主義となっていく段階で激化したということが鍵となる。（①）

ヨーロッパの君主国を財政的に支えていた御用銀行家としての宮廷ユダヤ人は、社会的には隔絶して存在していたが、「例外ユダヤ人」として特権を享受し、国家と直接結びつく政治的機能を果たしていた。［い］、ブルジョワジーが台頭し政治と連携する時期になると、ユダヤ人の富の意味は急速に失われていった。そうしたなかで曖昧で余分な存在にたいする憎悪の風潮が生まれ、他方で右派から左派までのさまざまな政党において、民衆の支持を獲得するための道具として反ユダヤ主義が利用されていく。アーレントは、政党によって流布され煽（あお）られる反ユダヤ主義を、近代以前の宗教的な反ユダヤ主義から区別し、その新奇さを強調した。（②）

政治的道具としての反ユダヤ主義の危険性は、ユダヤ人が［C］され、ユダヤ人一般として見なされることにある。具体的にユダヤ人と接触したことのない群衆（モッブ）が、個人的経験ぬきでイデオロギーとしての反ユダヤ主義に染まる。そこに次に述べるような人種主義的要素が組み合わさり、［C］された存在にたいする無責任で過激な暴力、「イデオロギー的狂信」の土壌ができあがったのである。

第二部「帝国主義」では、南アフリカで帝国主義政策を推進したイギリスの政治家セシル・ローズ（一八五三―一九〇二年）の「でき

ることなら私は星々を併合しようものを」という言葉に見られるような、ヨーロッパの富の無限の膨張のプロセスとその政治的意味が描き出される。

帝国主義は人種主義を政治的武器とし、人類を支配人種と奴隷人種に分ける。アーレントによれば、余剰になった富とともに、失業してヨーロッパで余計な存在になった人間が植民地へと輸出され、彼らは自分たちを支配的白人種として見なすという狂信に陥った。余計者として国外へと出た人間がそこで出会った人びとをさらに余計者と見なすという構図が生じたのである。また、帝国主義時代の官僚制支配では、政治や法律や公的決定による統治ではなく、植民地行政や次々と出される法令や役所の匿名による支配が圧倒的になっていった。アーレントは官僚制という「誰でもない者」による支配が個人の判断と責任に与えた影響を検証した。（③）

アーレントは、膨張のための膨張という思考様式のなかで人種主義と官僚制が結びつくことの危険性を強調している。膨張が真理であるというそのプロセス崇拝と「誰でもない者」による支配においては、すべてが宿命的・必然的なものと見なされていく。ひとつひとつの行為や判断が無意味なものになるのである。［う］、植民地における非人道的抑圧はブーメラン効果のように本国に翻り、合法的な支配をなしくずしにし、無限の暴力のための基盤をつくった。

アーレントはこの部の最後で、国民国家体制の崩壊の結果生まれた人権の喪失状態を分析している。第一次世界大戦後、国民国家や法的枠組みから排除される大量の難民と無国籍者が生まれた。共同体の政治的・法的枠組みから排除されている彼らは、すべての権利の前提である「権利をもつ権利」を奪われている。

第三部「全体主義」では、歴史的に知られた独裁や専制とは異なる全体主義運動と全体的支配の特徴が描かれる。そして大衆運動から強制収容所とガス室という「人間の無用化」にいたるまでの全体的支配の、さまざまな要素が分析される。

そのさいアーレントは、強制収容所という極限状態における人間の経験と現代大衆社会での孤立した人間の経験の関連性を指摘した。（④）

全体的支配は人間の人格の徹底的破壊を実現する。自分がおこなったことと自分の身に降りかかることとの間には何も関係がない。すべての行為は無意味になる。強制収容所に送られた人間は、家族・友人と引き離され、職業を奪われ、市民権を奪われた。自分がおこなったことと身に起こることの間には何の関連性もない。発言する権利も行為の能力も奪われる。行為はいっさい無意味になる。（⑤）

法的人格が破壊された後には、道徳的人格が虐殺される。ガス室や粛清は忘却のシステムに組み込まれ、死や記憶が無名で無意味なものとなる。また、全体主義的犯罪による善悪の区別の崩壊は、犠牲者をも巻き込む体制であった。アーレントは、自分の子供のうち誰が殺されるかを決めるように命じられた女性や収容所運営をゆだねられた被収容者の例をあげている。

さらには、肉体的かつ精神的な極限状況において、それぞれの人間の［D］が破壊される。個々の人間の性格や自発性が破壊され、人間は交換可能な塊となる、とアーレントは書いた。自発性は予測不可能な人間の能力として全体的支配の最大の障碍（しょうがい）になりうる。独裁や専制と違って、全体的支配はすべてが可能であると自負し、人間の本性を変え人間そのものへの全体的支配を遂行した。「不可能なことが可能にされたとき、それは罰することも赦（ゆる）すこともできない絶対の悪となった」のである。

一九六八年に『全体主義の起原』の英語版分冊本（三巻）が出たとき、アーレントはそれぞれの分冊に新たな序文を加えた。ヤング＝ブルーエルは、アーレントがナチズムやスターリニズムの分析にとどまらず、マッカーシズムなどその時代に生じてきた現象によって、全体主義をそのつど新たに理解しようとしたと指摘している。人びとを人間として「余計な者」にすること、多様でそれぞれが唯一無二の人びとが地上に存在するという人間の複数性を否定することが、全体主義の悪であった。ヤング＝ブルーエルは書いている。

全体主義は政治の消滅である、と彼女は論じた。［え］、それは政治を破壊する統治形態であり、語り、行為する人間を組織的に排除し、最初にある集団を選別して彼らの人間性そのものを攻撃し、それからすべての集団に同じような手を伸ばす。このようにして、全体主義は、人びとを人間として余計な存在にするのである。これがその根源的な悪なのだ。（『なぜアーレントが重要なのか』）

政治は、市民たちが法律に守られながら公の場で語り行為するということでもあり、人びとが複数で共存するということを意味する。アーレントは全体主義下で遂行された「人類に対する犯罪」を人間の複数性にたいする犯罪であると見なした。人間の複数性とは、共同体に属して権利をもつこと、交換可能な塊に還元されないことと連動するだけではない。ヤング＝ブルーエルも強調していることだが、それは、「複数である人間によって複数である人間について語られた物語のなかで真実性をもって記憶される権利、歴史から消されない権利」にも結びつく。これらの要素を分析し、考察しつづけながら、アーレントはナチズムやスターリニズムの終焉（しゅうえんご）後も生き残りうる「全

体主義的な解決法」（複数性の抹消）にたいして警告を発しつづけたのだった。

（出典　矢野久美子『ハンナ・アーレント』　なお、問題作成上、一部省略してある。）

問1　空欄 **あ** ～ **え** に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

あ　①または　②それすら　③しかも　④つまり

い　①しかし　②だから　③ちなみに　④ところで

う　①あるいは　②といっても　③さらに　④たとえば

え　①だが　②ところが　③むしろ　④すなわち

ア　**イ**　**ウ**　**エ**

問2　空欄 **A** ～ **D** に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

A　①結晶　②象徴　③縮小　④拡散

B　①アレゴリー　②カテゴリー　③フィロソフィー　④ヒエラルキー

C　①抽象化　②人間化　③明確化　④実体化

D　①身体性　②合理性　③不可侵性　④特異性

オ　**カ**　**キ**　**ク**

問3 本文中、次の一文が省略されている。（①）～（⑤）のどこに入れるのが最も適当か、番号をマークしなさい。 **ケ**

アーレントはこうした事態を法的人格の抹殺と呼んだ。

問4 本文中でアーレントは「反ユダヤ主義」の危険性について、どのように説明しているか、最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。 **コ**

① 本来、人はそれぞれ独自の価値を持つ、交換不可能な存在であるにもかかわらず、言語や文化の共有をきっかけに共同体が形成されることで、異なる言語や文化の中に生きる人々を排除しはじめたこと。

② 本来、人はそれぞれ異なる人格を持ち、異なる人生を生きているにもかかわらず、「ユダヤ人」という一般的存在として見なされるようになることで、その範疇に押し込められた人々が、無責任で過激な暴力にさらされるようになること。

③ 本来、反ユダヤ主義は宗教的な領域に限定された問題であったが、近代に入ると事態はさらに深刻になり、国家的アイデンティティを確認するためにユダヤ人を排斥するようになったこと。

④ 本来、人は国家に属することではじめてさまざまな外的な圧力や暴力に抗することができるようになるにもかかわらず、ユダヤ人に対する差別感情が彼らに無国籍化を強いてしまったこと。

問5 本文の内容に合うものを、次の中から二つ選び、番号をマークしなさい。ただし、解答の順序は問わない。

サ　シ

① アーレントにとって、過去の出来事や現象はすべて新奇なものであって、その新奇さをいかに理解するかという問題は、分析者の直接的体験を視座にするほかないと考えていた。

② アーレントは、既知の概念や一般原則にあてはめて過去の出来事を理解しても、現実そのものと向き合うことにはならないと考えていた。

③ アーレントによれば、帝国主義や全体主義と反ユダヤ主義は密接に関係しており、国家による資本の独占を企図した結果として、ユダヤ人の排斥が行われることになった。

④ アーレントによれば、帝国主義の時代、失業の結果、ヨーロッパから植民地に来ることになった人々が、現地で出会った原住民に対して、支配階層として振る舞っていた。

⑤ アーレントによれば、強制収容所において人間は完全に人格が無視され、モノとして扱われており、そのため、金銭と交換されることさえあった。

⑥ アーレントによれば、人間は複数の人々によって記憶され語られることではじめて人間としての尊厳を獲得したと言えるのであって、政治的孤立化は人権の喪失につながる。

Ⅱ

次の1～5の説明に当てはまるものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1 泉鏡花の代表的な幻想文学作品。

① 『夜行巡査』　② 『高野聖』　③ 『番町皿屋敷』　④ 『怪談牡丹燈籠』

ス

2 一般的に文学史上、耽美派に属すると言われる作家。

① 武者小路実篤　② 川端康成　③ 坂口安吾　④ 谷崎潤一郎

セ

3 芥川龍之介最晩年の代表作として高く評価されている作品。

① 『樗蒙』　② 『蟹工船』　③ 『歯車』　④ 『蜜柑』

ソ

4 太宰治によって執筆された歴史小説。

① 『右大臣実朝』　② 『少将滋幹の母』　③ 『坂の上の雲』　④ 『桜の森の満開の下』

タ

5 一般的に文学史上、無頼派に属すると言われる作家。

① 遠藤周作　② 小林多喜二　③ 織田作之助　④ 吉行淳之介

チ

Ⅲ

次の空欄 ツ ～ ニ に入れるのに最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1 あれだけ努力を重ねたのに、失敗続きなんて、彼も ツ ね。

① 内弁慶だ　② 自家撞着だ　③ 怪我の功名だ　④ 浮かぶ瀬がない

2 隠し事をせず テ 話し合えば、グループワークはうまくできるはずだ。

① 機微をうがって　② 錦を飾って　③ 心を洗って　④ 肝胆相照らして

3 兄はころころと仕事場を変えては、そのたびに金で苦労している。 ト とはまさにこのことだ。

① 愚公山を移す　② 柳に雪折れ無し　③ 転石苔を生ぜず　④ 長居は恐れ

4 もし君が新しい会社に入って本当に困っても、 ナ というから、そう簡単にあきらめてはいけないよ。

① 事が延びれば尾鰭がつく　② 習い性となる　③ 窮すれば通ず　④ 朝三暮四

5 人間関係の問題が起こったとき、社会制度全体を広い視野でとらえるような ニ 的視点が必要だ。

① リアリズム　② マクロ　③ ドグマ　④ メタファー

Ⅳ

次の1～5の傍線部と同じ漢字を含むものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1

猫のヒタイほどの広さの庭しかないが、我が家は我が家だ。

① 犯人逮捕にコシツする。
② 支払いは請求書に書かれたガクメン通りの金額でお願いします。
③ この現象をキカイに思うかもしれませんが、普通です。
④ ヒョウソウ的な問題については、ここでは議論しません。

2

集団へのキゾク意識が個人の幸福度を上げる。

① 私はゾクジンですから、あなたの趣味を理解しないのも当然です。
② かの町ではトウゾクの被害が後を絶たなかった。
③ 買い手のゾクセイを分析することがマーケティングには必要だ。
④ エイゾク的に支援をすることは難しい。

3

インガオウホウというように、悪いことをすれば、ばちが当たるんですよ。

① キッポウが舞い込む。
② 日本のホウキにくわしい知り合いの弁護士に尋ねる。
③ 田舎では人口減少でコミュニティーがホウカイの危機に直面している。
④ 商品をコンポウして、郵便局に持っていかなければならない。

ヌ　ネ　ノ

4 去年、祖父は、大病をワズラった。

① キョウテンドウチの大ニュース。

② コウトウムケイなふるまい。

③ センザイイチグウのチャンスだ。

④ ナイユウガイカンに悩まされている。

5 グラフで見ると、変化がケンチョにわかる。

① 課題に関しては、仲間とまずケントウする必要がある。

② 鉱石をケンマして宝石に加工する。

③ 薬物乱用の事態がロケンする。

④ 祖父は自らをケンキャクだと自慢している。

ハ

ヒ